特276
523
292.2

始

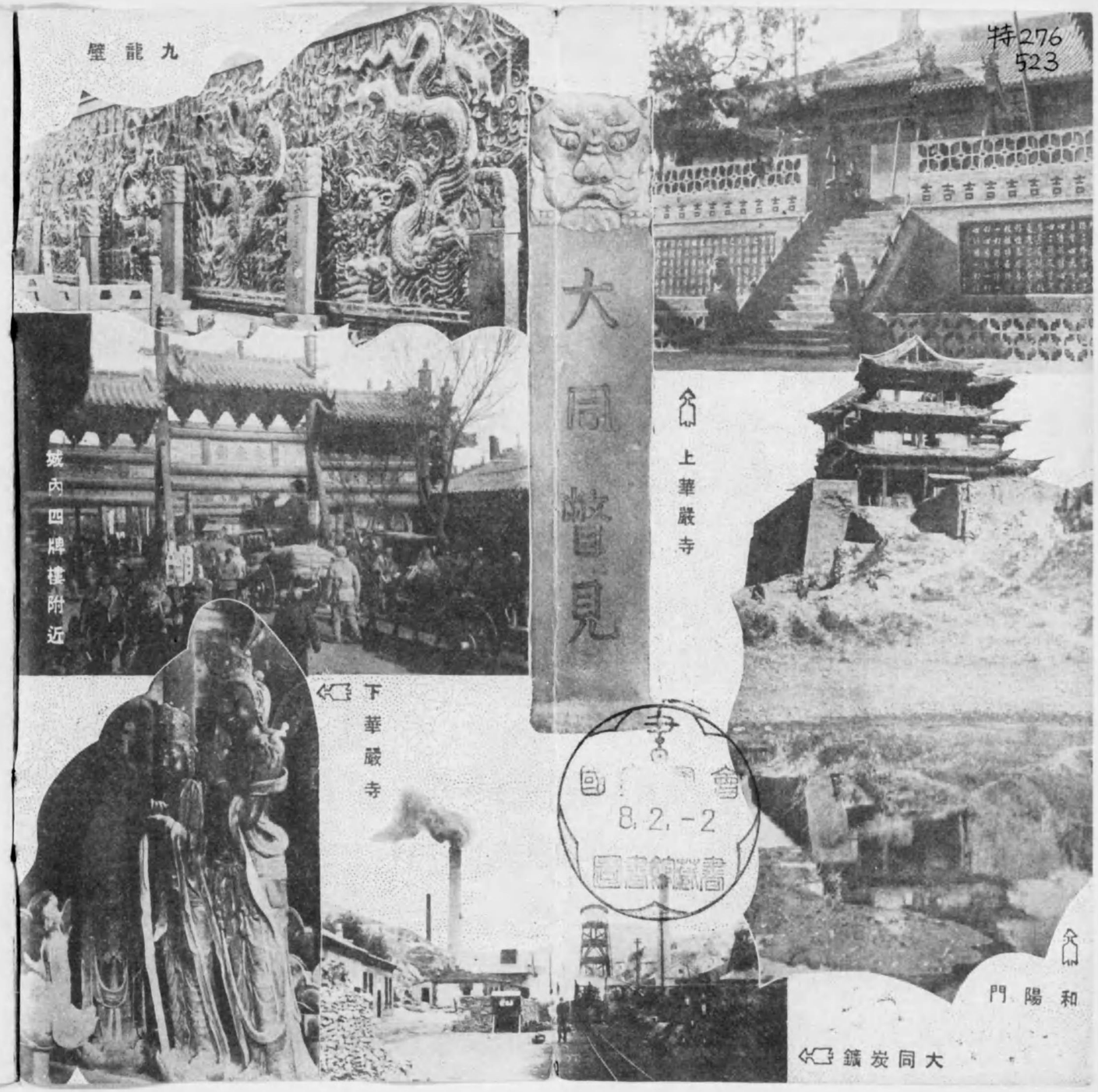
概觀・沿革

大同は京包線北京・包頭間の略中央、北京から三八三粁五(汽車にて約十一時間)の位置にある。

地理的には舊山西省に屬し大同盆地(東西百二十粁、南北百十粁)の中心に在し、海拔約千米の高原都市にして、城の南方に雁嶽が聳え、北に萬里長城を眺め、東門外には御河が流れて居る。古來蒙古との交通の要衝であり、又邊疆防備の樞地でもあつた。現在は晉北自治政府所在地として政治、產業、經濟、交通上極めて重要なる地位を占めて居る。

この地方は蒙古に近く所謂邊疆の地であつたため、周以前に於ては全くの北狄の地とされ、漢代に至つて平城縣が置かれ雁門郡に屬し東部都尉の治所となり、更に北魏の代には六代百餘年間その帝都となつた。即ち登國元年跋珪氏(太祖道武帝)位に即き國名を魏と號し(皇紀一〇四六年仁德天皇七四年)四圍を平定し天興元年都を茲に定め平城と呼んだ(皇紀一〇五八年仁德天皇八六年)。それより孝文帝(高祖)が太和十七年(皇紀一〇五三年仁賢天皇六年)洛陽に遷都するまで百年の永きに亙つて王城の地であり、この北魏の代は佛教藝術の最も盛な時代で、大同石佛寺も此の間に工を起され、それが百年後の我が推古朝に於ける佛教藝術に影響して來て居るのである。下つて遼(契丹 皇紀一五七六—一七八五)、金(女眞 一七七五—一八九四)の五京の一、西京大同府となつた。元以來等しく大同縣を設け前清時代には外に二州六縣を管轄したこともある。民國元年(明治四十五年)五月府を廢し、縣を殘し、同三年六月雁門道道尹の治所と爲したが國民政府は道を廢し專ら大同縣政府所在地として今次事變に立至つた。

今事變に際しては我が山西作戰部隊の勇猛果敢なる進擊により九月十三日(昭和十二年)陷落、同二十日晉北治安維持會が成立、越えて十月十五日地方民衆の興望により同地方十三縣を包含する區域をして晉北自治政府が樹立され、その所在地となつた。



氣候

氣候は所謂大陸性に屬するが、極寒期に於ても零下二十度に下る事は少く、晝間は零下十一、二度であるから比較的凌ぎ易く、從つて家屋の構造も溫突は設けてあるが、滿洲に見る如き二重窓は殆ど無い。

盛夏は三十度内外を示すが朝夕は非常に涼しく、空氣は乾燥して居るから蒸暑いとか鬱苦しい等のことはない。

雨は七、八、九の三箇月間に一年中の雨量の四分の三以上を降り盡し、他の月には雨を見ることは稀である。

四月から六月の頃にかけて午頃から季節風が吹き、午後六時頃まで黄塵萬丈の景を呈するので外出もならぬ程である。

住民・人口

人口は現在城の内外を併せて約七萬と稱せられ殆どが漢族で、日本人は三千名(昭和十三年十月現在)を越えて居る。

住民の生活程度は極めて低く且つ簡素で、城内は概して文化的なるも、一歩城外へ出づれば家は僅に雨露を凌ぎ、衣は身を包むに足る程度が大部分で、中には半ば穴居生活と言つたものもある。

此のあたりは所謂大同美人の産地で、北方、南方の美人型とは異つた、石佛寺の佛像を思はす獨特の容貌を有して居る。

市街

漢代の平城は現縣城の東古城村に當り、現在の地に定まつたのは北魏の拓跋氏が都を茲に定め、城壁を築いたのが始まりである。城壁は明の初め洪武帝が蒙古族の來襲を防ぐため除達を鎮守に命じ重修を爲したものである。

市街は大同驛の南約四粁の地にあり、各々千八百米角の城壁に圍まれた正方形を爲し、東西南北の四門を有して居る。

道路はこの東西、南北を連ねる幹線道路が中央四牌樓にて交叉し、他の道路はこの幹線道路に準じ概ね並行に作られて居る。

◎都市計畫◎ 市街には千五、六百年前の木造建築物十數箇、更に遼代のものと考證されるもの二、三棟あり、考古學上貴重なものが多く、又市街全體も他の支那都市とは異つた樣式をして居るので、新都市建設の爲にこれらを破壞するに忍びずと爲し、新都市は東大教授内田祥三博士の計畫に基き大同城を中心とする「**衛星都市**」計畫に基いて建設され將來の人口膨脹に備へ、一方これに依り建設される都市の街區は一學校を中とする「**近隣單位**」の方式、即ち各街區は一小學校と小公園を中心に、この小學校を一杯にするだけの兒童數を有する樣に住宅其他を配當て、この一單位内の需要を滿たすやうに商店其他の設備を爲さしめるもので、この方式にするとこの單位區劃内に於て買物其他の用が足せ遠く外出せずとも濟み、從つて道路も外部からの交通路となる事は稀で、その區劃内の人々にのみ利用される事となり、住居の安靜が保たれると言ふのである。

交通

鐵道

鐵道は京包線によりて張家口を經て北京へ約十一時間(三八三粁五)、厚和を經て包頭へ約十時間(四三三粁)にて達する。北京との間には一日二往復、包頭との間には一往復の直通列車の外に張家口、厚和との間には夫々一往復の區間列車が運轉されて居る。

太原へ至る同浦線は茲を起着點とし現在は寧武まで通じ一日一往復、更に大同妥礦の口泉鎮との間に口泉線が一日二往復(混合列車)運轉されて居る。

自動車線（蒙疆汽車公司經營）

石佛寺遊覽バス

毎日　午前十時大同驛前發　午後一前半歸着

料金往復一圓五十錢　軍人小兒半額

左雲線（毎日）

往　大同發午前八時　左雲着正午

復　左雲發午後一時　大同着七時

料金二圓五十錢

代縣線（毎日）

往　大同發午前八時　代縣着午後二時

復　代縣發午前八時　大同着午後二時

料金四圓九十五錢

太原線（隔日）

往（二〇二便）

大同發午前九時　陽明堡着午後三時

陽明堡發午前九時　太原着午後三時

復（二〇二便）

太原發午前九時　陽明堡着午後三時

陽明堡發午前九時　大同着午後三時

料金往復一圓五十錢　軍人小兒半額

市內交通

市街バス（驛城內間三臺運行）

始發午前六時　終發午後十一時半　車間十分毎

料金驛—四牌樓間十錢　四牌樓—南門間五錢

タクシー

城內　一圓　驛（城內より）　一圓八十錢

一時間　四圓五十錢

石佛寺行（三時間）　十三圓

大同炭礦　二十圓

洋車

四牌樓↑↓東西南北各門　五錢

驛—北門　十五錢

驛—四牌樓　二十錢

商業

一般に山西商人は商道に長け粘り強いと言はれて居る。

大同に於ける商店數は支那人商店八百五十軒、日本人商店三百軒に及び、最も多數を占めるものが雜貨商の百十軒、次で米麵商の六十五軒、皮革商三十軒、油鹽商二十五軒、阿片小賣二十五軒の順位である。日本人側は事變後他地方と同じく、別表の如く料理店、カフエー等の娯樂、飲食店が最多數を占めて居る。

前記支那人商店の資本額は約四十萬圓、年取引額（除石炭）八百萬圓と稱せられる。

主なる取引物は移出が糧石、馬鈴薯、蛋粉、鷄卵、阿片、移入が綿布、綿糸、雜貨類である。

併し物資の需給は圓滑を缺き、物價は相當高價となつて居るので、華北自治政府では近く物資需給統制を圖つて居る。

日本人職業別表

職業別	內地人	半島人	計
旅館下宿	九二	一一	九二
呉服洋服	一一八	二九	一一〇
料亭	一一三	一一	二一〇
カフエー	三七	二一	三九
飲食店	二九	一一	三〇
食料品店	一一三	一	一一三
雜貨商	一八	一一	一九
葉子店	一二	二	一三
寫眞及材料	五	一	七
時計及貴金屬	二	一	二
印刷	五	一	五
醫師	四	一	四
齒科	一	一	一
遊技場	一	一	一
料理屋	八	二	一〇
美容院	一三	一	一三
新聞雜誌文具	七	一	七
豆腐屋	三	三	六
洗濯屋	六	一	六
藥局			

土木建築請負	三一	一	三一
其他	四一	六	四七
計	二七九	三〇	三〇九

婦人職業別表

職業別	日本人	半島人	計
藝妓	七六	一	七六
酌婦	三〇	六五	九五
女給	九五	六	一〇一
計	二〇一	七一	二七二

産業

この地は北魏の大月氏の賈人が初めて硝子を製造したところで美術工藝史上に有名であるが、工業其他諸産業共に比較的振はず附近の大同炭礦の存在のみ世に知られて居る。

物産としては雜穀、羊毛、皮革、鷄卵、木材、阿片を産し銅器、織物等が多少製せられる。

工業としては馬鈴薯を原料としてアルコールを製する晋北興農酒精廠と製粉工場がある。

名勝古蹟

上華嚴寺(上寺)

城内西南隅上寺巷にあり普通に上寺と呼んで居る。

開基は遼の清寧八年(皇紀一七二二年後冷泉天皇康平五年)にして、當時諸帝の像を安置し歴代帝王の尊信を受けた名刹であるが、現在それらの像は失はれて居る。其後明の成化・萬曆・崇禎、清の康熙年間に重修が行はれたが、當初の面影を失はず支那最古の木造建築の一つである。

單層入母屋造りの大殿堂は一種の二平先浩組の科拱を用ひ奇なる刹型を持つ叉鼻を作り、軒は二重椽隅屋椽となつて居る。内地の四面の壁には極彩色の佛畫を描き頗る美事なもので「雲中鐘樓西街興榮魁信心弟子董安」の銘がある。

佛殿の正面中央は毘盧沙那佛、左に阿彌陀佛、寶王佛、右は成就佛、阿閦佛の五像、更に左右兩側には十二體の立像が安置されて居る。

壁畫は華嚴經中の一說即ち釋尊の說一爲毘盧佛の眞實に至るや忽然として空中に毘盧佛を中央に、左右に阿彌陀・寶生・成就・阿閦の諸佛を初め三世十方の諸佛菩薩が畫く出現し給ふ有樣を殿堂の中に描寫したのである。大雄寶殿を下ると正面に五間四面單層四注の天圭殿がある。

下華嚴寺(下寺)

上寺の東にあり四大古寺の一である。

建築年代は明かでないが、大同府誌樑記に依ると遼の重熙七年(皇紀一六九八年後朱雀天皇長曆二年)建造とあり、上華嚴寺よりも更に古い。

構造は上華嚴寺と殆ど同樣の樣式である。堂内中央正面に釋迦、左右に藥師、彌陀佛を、更にその前には多數の菩薩、供養天人を安置して居るが、注目すべきものは本尊の蓮坐の瓣一つ〳〵に觀音像が刻まれて居ることである。各佛像とも莊嚴端麗な相好を爲し、支那に多い喇嘛的な色彩は少しも見受けられず、建築樣式にも特徴が多い。經藏内には以前多數の貴重なる經卷が藏せられて居たが、民國三年の内亂に殆ど紛失した。

南善化寺

城内小南街南寺巷にあり、俗に南寺と稱して居る。

規模廣大にして境内には大雄寶殿、三聖殿、天主殿が整然として建ち並んで居る。

この寺の緣起は西京大善恩寺重修大殿碑記に

「按寺建於唐以皇寺與道觀皆賜開元之多而寺獨易名不是」とあり、碑文にも「始於唐玄宗開元年間、名之開元寺、其後傳之久更其名曰大普恩寺、迨遼末兵變而後、不無殘癈、金太宗天會六年寺僧圓滿重修、葺焉而古刹爲之一新、歴明正統十年僧太用、奏請藏經、又爲整飾爲多官習儀之所、後更其名曰普化寺、萬曆崇禎年間亦因之而規制」……とある所より現存のものは金の天會六年(皇紀一七八八年崇德帝大治三年)と考へられる

内部には上記二寺と同樣、優美な彫刻になる佛像安置され壁畫は西側の一面のみ殘り他は塗りつぶされて居る。

九龍壁

城内内牌樓大東街西側にある。

明の代王(太祖洪武帝十三子)が洪武二十五年(皇紀二〇五二年我が南北朝對立の最終年)大同に來鎮せる時粤の稽史來が建造せるものと言ふ。

「九龍神蹟」の碑記に依ると「道光(皇紀二四八一年德川十一代家齊の代)十九年夏六月希有な旱魃に滿郡長、兩龍池に祈禱して雨乞ひしたるに龍神現れ俄に大雨降る。依つて增修を爲し碑を建てたり」とあり、この時「靈蹟顯應」の碑を建立した。

壁の高さは三十支尺、横二十支丈あり。九匹の龍が各々異つた型と色を以て彫られ技工精緻を極めて居る。

毎年春秋の住日に前面の池中に水を入れ、その影を映し池中に龍躍る狀を觀賞する例になつて居る。

曹福廟

東門を出て御河を渡つて行くと東塘坡と呼ぶ小丘に叢林に包まれた中に廟堂の聳えて居るのを發見する。これが曹福廟で明代の創建に成るもので、明朝の義僕、曹福がこの地に死せるを後人その忠をたゝへ祀つたものである。

廟の裏玉泉閣に上ると西の方大同城は一眸の下に收め得、東には採掠山あり、山下文鴛湖に投影する影も又美しい。

其他の名勝古蹟

1 文廟 城内東南隅文廟街
2 清眞寺 城内西南九龍街
3 東華嚴寺 東門外
4 善化寺 同

官公署、會社

張家口總領事館大同出張所、領事館警察署、晉北自治政府、居留民會、滿鐵、興中公司大同出張所、蒙疆銀行大同分行、蒙疆電氣通信設備株式會社、蒙疆汽車公司、蒙疆電業株式會社大同支店、晉北實業銀行、大同郵電局、蒙疆運輸公司大同出張所、興農酒精廠、羊毛同業組合、蒙疆新聞社大同支局

ジャパン・ツーリスト・ビューロー

(大同大街一一二)電話六六八番

旅館

晉北ホテル	電話 三二三	宿泊料金 五圓—十二圓	城内皇城廟前街五號
山西ホテル	三四六	四圓—六圓	城内大北街一六三號
南海ホテル	三三一	五圓	城内司令部街七號
大同ホテル	三二九	五圓—八圓	城内關池街二七號
三鈴ホテル	三二六	五圓	城内大西街一四號
甲州屋ホテル	三四五	四圓—五圓	城内城皇廟前街一〇號
松屋ホテル	五三三	三圓均一	城外(北門外)玄冬門街九號
東亞ホテル	六四四	三圓均一	城外(北門外)北關街一三號

雲崗石佛寺

東洋三大藝術の一と言はれる雲崗石佛寺は大同から左雲道路を西行すること二十粁、武周山中の雲崗村にある。

茲の石佛は燉煌の鳴沙山、龍門、天龍山等と共に世界的に知られ、佛教文化東漸の跡を尋ねる絶好の歴史的且藝術的資料となつて居る。

石佛寺一帶の初印象を木下杢太郎(醫博太田正雄)氏は

「……既にして山が開けて遙か西の方に穴の澤山開いて居る山腹が見え出しました。同時にまた二つの建物の色のついた屋根が見えました。わたくしは……驢馬をむやみに急がせて流水を涉つて行きました。始めて龍門を見た時もさうでしたが、目的物の一部が見え出した時の氣分は又格別のものです……。

石佛寺は情趣に滿ちた風景に取卷かれて居ました。素燒の陶のやうな色の高い崖が長く東西に延長して、其の南面に無數の洞窟が鑿られて居ます。……一大窟中に大きな塔の立つて居るのや入口の穹隆に彫物の見えるのや……馬鹿に暗示的に感ぜられました。誇張して言へば昔の支那が中央亞細亞の廢墟に達した時の氣分にも似通ふことでせう。

丘陵は六、七百歩の間その南面が殆ど直線的に斷崖を爲し、而してそこにかの石佛寺の建物を中心にして……諸窟が並列して居るのです。西の一端に至り山陵は俄に南方に曲ります。……此の丘陵に對して遙か南方に又之と平行に走る丘陵があります。此の間の帶型の平地は武周川の流域で河の北側には刈殘された高粱の株と芽とが黄緑の縞を作つて居ます。楊樹と村落と寺樓と廟とがその間に散布します。此に二千年の石窟が痛ましい流轉の迹を殘し、而も尙夢の如く美しい古代文化の羅を止めて居る時にその壁を壁としその柱を柱として數百の農民が衣食して居ます。向ひの丘陵の頂には尙崩壞として緑の色が見えます。高粱の實を打つて居た人々はもはや殆ど野に其の影を絶ちました。實に平和で閑寂な地方です。こゝは單に叙情的

風景を味ふためばかりの目的でも、こゝへ來る價値があると思ひました」（同氏著『大同石佛寺』より）

大同石窟は支那が世界に誇るべき大藝術に拘らず支那人士の間には餘り知られず、發見も研究も主として日本人に依つて爲された事は日本學界として大いに誇るに足る事である。

卽ちこれを專門家として最初に發見したのは我が建築學の權威東京帝大教授工學博士伊東忠太氏が、明治三十五年六月横川省三氏、宇都宮五郎氏等と共に踏査の途上偶然に發見されたもので、其後專門家、好事家の調査研究が續けられ、それらの文獻のみにても枚擧に遑がない程である。

伊東博士はこの時の事を左の如く述べられて居る。

「明治三十五年夏六月中旬淸國旅行の途次淸國山西省大同府城の西方なる雲崗と稱する一寒村を訪ひ、拓跋魏の朝に造營せられたる石窟寺の一群を見、その形式手法の奇異なるに驚きしが、これ實に余の亞細亞旅行中に於ける最重要なる事項にして……當時私かに以爲く山西大同の地は後魏の平城なり遼金の西京なり後魏の遺址の如きは恐らく湮滅して存在するものなからんと……かくして大同に到り、其の附近を探索するに及び不圖も……一群の石窟寺を發見せり。意外にも是實に後魏の造に係る古刹にして、千五百年前の術觀依然として今日に存在されたるものなり。其形式手法は所謂我推古式と全然符節を合するのみならず又多量の泰西クラシツク手法を加味し、一見その西域藝術の直系たることを示せり。……余が曾て信じたる「鼠寧藝術（註―佛教藝術の系統、伊東博士說に對する異論もある）は蔥嶺を越えて今の支那土耳其斯坦に入り、塞外を通過して朝鮮に入り、更に日本に傳來して推古式を爲せり」との假定に對する有力な證證を得たるを悅べり」……。

而して其起原につきては

「西曆三八六年拓跋珪（道武帝）位に卽き國を魏と號し四隣を征服して都を平城に定む……帝崩じ明元帝嗣ぐ（皇紀一〇六九年反正天皇四年）帝以て石窟の土を起せし……大武帝が太平眞君七年（皇紀一一〇八年―允恭帝第三十七年）佛教經卷を破壞焚燒し、沙門を抗殺し佛教史に三武一宗の厄の條を作りたるを以て之を觀れば石窟伽藍の造營も一時打擊を蒙りて中絕の運命に遭遇せしなるべし。四百五十三年（允恭帝四十二年）文成帝卽位し（興安元年）佛教を興隆す。石窟寺の工事も又必ずや再び繼續せられたるならん。……獻文帝嗣で石窟寺に屢々幸す。蓋し親ら工事を督勵せられたるものならん。

とあり明元帝の代から正光年間（皇紀一一八〇年）まで前後一世紀に亘り繼續されて居たことが判る。

起源に關しては、**大淸統一志**に「**元魏建、始神瑞祭正光、歷百年而工始成**」とあるより明元帝の神瑞年間に始まつたと爲すものと、**後魏書、釋老志**の「**曇曜以復佛法之明年**（興安二年）……**帝復素以師禮、曇曜白帝、於京城西武州塞、鑿山石壁開窟五所、鐫建佛像各一、高者七十尺次六十尺、飾彫奇偉、冠於一世**」による興安二年（皇紀一一一二年）文成帝が太武帝の廢佛令に對する懺悔の意味で沙門曇曜の奏により太祖以下五帝の爲め開鑿したのが最初であるとの說及び**智昇**の**開天釋敎目錄**の「**沙門曇曜……以魏和平年中……武因山北面石厓、就而鐫之、建立佛寺名曰靈巖、龕之大者、皆大二十餘丈可受三千許人……**」に依り和平年間（皇紀一一二〇年雄略天皇の御宇）以後の開窟と爲す三說がある。

石窟は東西に延長約一粁に及び東部を第一區（三百米）、中間を第二區（百四十米）、西部を第三區（百二十米）、更に西端を第四區（百五十米）に分ち第一區より第三區までの間重要なもの二十あり、第四區は今まで顧みられなかつたものであるが注目すべきもの十五（圖中イよりヨまで）ある。保存計畫立案者たる五十嵐牧太氏（伊東博士高弟）に依ると第四區の諸窟は第二區の無名小窟（圖中レ、タ）二箇と共に最古のもの（明元帝の神瑞年間開鑿）とされて居る。

尙曇曜が太祖以下五帝の爲に開窟した五窟に就ては第十六窟より二十窟までと言ふ說（關野貞博士、塚本靖博士）と、第五窟・第十三窟及び外三窟（第二區中）との考證（五十嵐牧太氏等）の二說が行はれて居る。

〔石窟の呼稱は研究者の各々により相違があるので、本記には寺稱（括弧內上部）と關野、常盤兩博士命名（同下部）の二種を記しておいた〕

第一區

第一窟（石鼓洞、東塔洞）

第二窟（寒泉洞、西塔洞）

共に同型式のもので中央に塔婆型を彫り遺し周壁に多くの佛像や佛龕を浮彫りにして居る。第二窟からは水が湧き出でゝ臺兩旱魃に左右せられず、寒泉洞の名も茲から來て居るらしい。

第三窟（靈巖寺洞、隋大佛洞）

內陣、外陣より成り、雲崗石窟中最大のものである。卽ち內陣は幅約四十米、高さ約十二米、外陣は幅約四十七米、高さ四米。左右に入口があり窓も穿つてある。外陣は大破して居るが、內陣には大佛像二區を彫刻せんとしたものらしいが、兩方の大三尊佛のみ完成し東方は未完成である。本尊は丸彫に近

く椅像にして高さ約十米、兩脇侍は約六米で相對坐佛、姿勢整齊にして流麗を極めて居る。

第四窟

第三窟西方の小窟で幅約七米、奥行五米、中央に平面長方形の壁柱を遺し、前後面に佛龕を作る。四壁は荒だ破損して居る。

第二區

第五窟(阿彌陀佛洞、大佛洞)

石佛寺境内、東端の大窟にして前面に五間四層の檐を翻飜に架してある。廣さ東西二十二米、南北十八米、規模宏壯である。本尊釋迦如來坐像は高さ約十七米、手の中指の長さだけでも二米以上あり、雲岡石窟中最大のもので魏書釋老志「高者七十尺」に當るものではないか(五十嵐氏)と言はれて居る。兩脇侍は高さ六米　壁面は七層に分ち佛龕を刻して居り、その彫刻に見るべきものがある。前室に熙治、康熙、咸豐年間の重修碑が建つて居る。

第六窟(釋迦佛洞、大四面佛洞)

第五窟同樣前面に四層檐が架してある。廣さ縱横共に約十四米、中央に東西八米、南北七米の方柱を遺し、後壁に深さ二米の大佛龕がある。壁面に佛龕を刻してあるのは他と同樣であるが、注目すべきは悉多太子弓技、後宮婦進、父子對話、老者に遭遇するの圖、病者に遭遇するの圖、死者に遭遇するの圖、沙門に遭遇するの圖、婦女勝氣の圖、出家踰城の圖、苦行の圖等の諸樣の佛像圖が刻されてある事である。

第七窟(準提閣菩薩洞、西來第一山洞)

窟前の左斷崖を鑿開して三層檐を建て、居る。その初層に西來第一山の額がかゝつてある。東西九米、南北六米、志井の高さ約九米。

第八窟(佛爺洞)

第七窟と殆ど同大同意匠で東西九米、南北六米、前面に欄閣を構へたと見られる跡がある。拱型の入口の内側下に金剛力士、其の上部東に漂雲天像、西に提綱天像を陽刻し、姿勢自由にし表現の美に富み、其他壁面の諸彫と共に印度との交通を物語るものとされて居る。

第九窟(阿閦佛洞、釋迦洞)

窟は前室の内陣に區分され、前室は廣さ東西十一米、南北四米で、二本の柱が立ち内陣への入口上部に窓が開けてある。内陣は東西十一米、南北十米、高さ約八米の釋迦如來の椅像を中央に兩脇侍を刻してある。前室内陣共に周壁の彫刻に見るべきものが多い。

第十窟(毘盧佛洞、持鉢佛洞)

前者と同樣の意匠構造で前室東西約十一米、南北四米、内陣は東西十一米、南北十米、中央方座上に鐵鉢を持つ釋迦佛を安置してあるが、全く後世の補修のものと見られる。

この窟の壁面諸彫も印度の影響を蒙つて居ると察せられる。

第十一窟(接引佛洞、四面佛洞)

幅人口に於て九米、奥に於て十一米、奥行十米あり、中央に約五米方の角柱が天井(九米)に達して居る。四面に各高さ三米許り立佛像脇侍像があるが皆補修を受けたものと見られる。只東壁上部に「太和七年歲在癸亥八月三十日」(註―皇紀一一四三年清寧天皇四年、北魏洛陽遷都の十年前)の碑銘(全文下掲)があり、年代を明かにすると共に當徒相謀つて作りたるを證して居る。

第十一窟銘文

邑師法示……

太和七年歲在癸亥、八月卅日、邑義信士女等、五十四人、自惟、往因不積、生在末代、甘寢昏境、靡由自覺、微善所鍾、遭値聖主、道教天下、紹隆三寶、慈被十方、澤流无外、乃使晨夜改昃、久寢斯悟。弟子等得蒙法潤、信心開敷、意欲仰酬洪澤、奚能從、是以共相勸合、爲國興福、敬造石龕形像九十五區及諸菩薩、願以此福、上爲皇帝陛下、太皇太后皇子、德合乾坤、歲踰轉輪、神被四天、國祚永康、十方歸伏、光揚三寶、億劫不墜、又願義諸人命過諸師、七世父母、内外親族、神栖高境、安養光接託育寶花、永辭穢質證悟无生、位超羣首、若生人天、百味天衣隨意澁服、若有宿殃、墜落三途、長辭八難、永與苦別、又願同邑諸人、從今已往、道心日隆、戒行清潔、明鑒實相、彰揚慧日、使四流涸竭道風常扇使慢山崩頽、生死永畢、佛性明顯、登階住地、未成佛間、願生生之處、常爲法善知識以法相親、進止俱遊、形容影響、常行大士、八萬諸行、化度一切、同等正覺、違反累劫、先師七世父

第十二窟(離垢地菩薩洞、椅像洞)

前室は間口八米、奥行四米、二本の柱を建て、後室は幅七米、奥行五米、高さ三米の壇上に本尊と四菩薩を安置す。殆ど補修されたものと見らる。

第十三窟(文殊菩薩洞、彌勒洞)

間口十米、奥行八米、高さ約十五米の彌勒菩薩坐像を作る。後世の補修の跡が多いが五十嵐牧太氏は魏書釋老志「次者六十尺」に該當するものと考證して居る。

第十四窟(千佛柱洞)

東西十一米、奥行七米、千佛佛を刻せる方柱に依つて前室、内陣に區劃して居るが、左右壁の龕に殘つた佛龕以外は甚しく破壞して居る。

第十五窟(導佛洞、千佛洞)

巖さ縱横共に約六米、前同樣破壞して居るが千體佛を刻んであるのが判る。

第十六窟(接引佛洞、立佛洞)

内部は橢圓形を爲し、東西十二米、南北九米餘りであるが入口は約一米程で而も半ば土に埋れてある。正面に約十二米の立像佛の外多くの大佛像を配し壁面高所に千佛を刻す。

第十五窟、十六窟の間に東西十一米、奥行七米の無名の大佛龕があり見るべきものが多い。

第十七窟(普賢菩薩洞、彌勒三尊佛洞)

東西十一米、南北七米餘り、本尊彌勒菩薩椅像は高さ約十四米、極めて壯麗である。側壁の佛龕内に脇侍佛を作り、其他壁面には大小の佛龕及び千佛像を刻す。

第十八窟(普賞菩薩洞、立三佛洞)

東西十七米、南北七米、蓮坐上の立像本尊は高さ約十四米、その左右に十七米餘の脇侍像計四米を配し規模甚だ宏壯である。周壁は他と同樣佛龕及び千體佛を刻す。上窟東側の下部に

「大代大和十三年、歲在—己巳、九月壬寅朔、—十九日庚申、比丘尼惠—定、身罹重患、發願造—釋迦、多寶彌勒像三區、—願患消除、願現世—安穩、戕行福利道心—日增、誓不退轉、以此—造佛像功德、建及七世—父母、累劫諸師、无邊—衆生、咸同斯慶」

の銘文を刻してある。

第十九窟(大佛三洞)

第十九窟は三箇の洞より成る。

左　洞(阿闍佛洞)

中洞の東方の洞で東西約八米、南北約五米、天井の高さ九米、本尊は八米の椅像、脇侍は各五米である。

中　洞(寶生佛洞)

三箇並んだ洞の中央の窟にして、東西約十九米、南北十一米、入口は約四米中央の結跏佛像は高さ十四米、入口上部の窓の左右の龕陽に高さ四米の菩薩立像を刻してある。

右　洞(阿闍佛洞)

中洞西方にあり、左洞と同樣の構造にして東西約七米、南北五米、西南角は崩壞して居る。本尊は高さ七米の椅像で脇侍は左のみ殘つて居る。

第二十窟(白耶佛洞、大露佛)

最初は窟内にあつたものが前面崩壞のため殆ど露佛となつて居る。中央に釋

迦の坐像、左右に脇侍を作つたが左のみ殘つて居る。

本尊脇侍共諸以下埋沒して本尊は高さ十米、脇侍は六米程であるが、埋沒せる部を合すれば本尊は十四米はあつたと見られる。

第四區

幾多の小窟佛龕があり、規模は小なれど後世の補修少く考證上の好資料とされて居る。

第二十一窟(西塔千佛洞、塔洞)

第二十窟の西方二百米にある縱横共に六米、柱の方型の窟で中央に底部に於て方二米を有する五層塔を遺して居る。塔の各層は柱を以て五間に區切りその中に小佛を刻してある。塔の構像は當時の木造建築の一斑を示すものである。

古說に依るとこれ等石窟の佛像彫刻のモデルとして各地から美男美女を召し集め、この子孫が現在の大同美人を爲すと言はれて居る。

石窟の前面には開窟當時譽巖寺が管理寺として建てられ、其後山西通志に依ると同舛、靈光、鐘國、護國、崇福、童子、能仁、華嚴、天宮、兜率の十寺があつた事と誌されて居る。

以上で石窟の大略の說明を爲した次第であるが、窟はこの外無數にあり重要なものも少くなく晉北自治政府に於ても保存委員會指導の下に保存計畫を進めて居る。

大同炭田(晉北炭田)

〔地域〕　大同炭田は大同盆地の西方を縱走する口泉山脈から以西の高原地帶、大同、懷仁、右玉、平魯、朔の五縣に亘り、北東—南西一二〇粁、北西—南東一七粁、面積二四一七平方粁(撫順炭礦の十五倍)に及ぶ宏大な地域を占めて十五區に分たれる。

鑛區表(靖古大觀に依る)

縣別	炭田	面積(平方粁)	炭層厚(米)	總量(百萬噸)
大同・朔・懷仁・左雲・右玉泉府	窰子頭、口泉河	二六	三・五	有煙炭　二七
同	窰子頭、吳家間	八六	六・〇 同	六七四
同	吳家窰董家莊間	三二五	六・〇 同	一、六六〇
同	黃河莊、朔縣間	五四四	六・〇 同	四、三四九
同	臺廟子、四考溝	三三八	六・〇 同	二、八七〇
源	源　窰郎　恒山	九六	六・〇 同	六四九
源	源　西　窰	一	三・〇 同	五
同	銀牛溝	二	七・〇 同	一七
同	白道子	三	八・五 同	三八

同	松樹溝	四	四・〇	同	一九
同	同	三	三・〇	同	五
雷	嘴	九	一・〇	同	一〇
郎	銀	九	六・〇	同	四〇
廣	廠	九			
雷					
合計		一七四一七	一	一〇七・六〇	

〔地質〕 炭田の東部口泉山脈は寒武利亞奥陶紀、頁岩、石灰岩等から成り此の上層に下部含炭層である二疊石炭紀層の礫岩、頁岩があり上部含炭層である珠羅紀、頁岩、礫岩、砂岩等は其の上部に互層をなして居る。

〔炭層〕 本炭田中稼行出來得る炭層は總數七層であるが、現稼行區域内では三層乃至四層と豫想せらる。各層の厚さは一定せぬが一・二米―三米餘に達する。

〔炭質〕 高度脂青炭で灰分少く質堅硬、立方形狀に裂碎する性質を有し大塊を得る事が容易で、塊炭（三寸立方）の割合は七十%乃至九十%である。發熱量高く、火つき、火持ち良好であるから工業用炭、家庭用炭として極めて優良である。尙下部含炭層の石炭紀に屬する石炭は粘結性を有してゐる故骸炭製造にするものと考へられる。

〔埋藏量〕 炭田が餘り廣範圍なるため未だ全體に亘り確實に精査せられたることなく正確なる埋藏量を推定し難いが、百億乃至百二十億噸に達すると云ふ。假に百二十億噸とし採掘率六十%の率で實收炭七十億噸としても一箇年四千萬噸（註―昭和十一年の我が國石炭消費量四千九十三萬噸）掘るも尙一七〇餘年間供給する事が出來る。尙最近の調査のによると四百億噸と稱せられてる。

〔特徴〕 本炭田は採掘技術上より見て、左の如く極めて理想的な天然條件を具備してゐる。

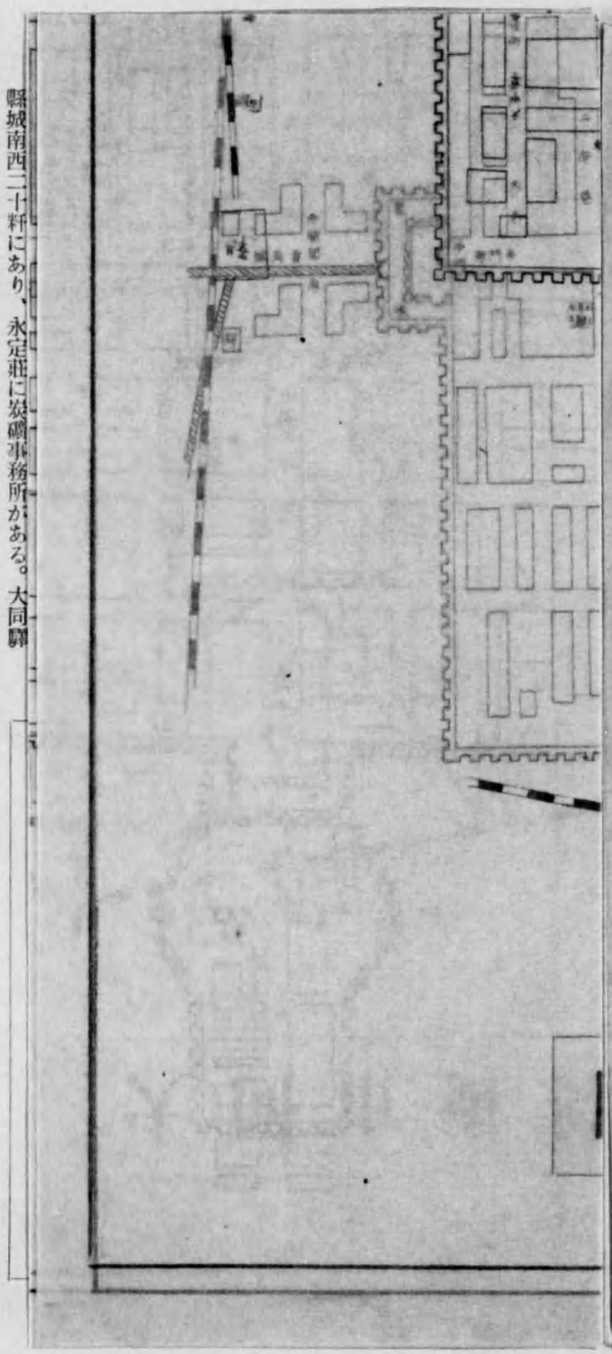
一 炭層は地質的變動を受ける事甚だ少く、斷層皺曲は稀である。

一 天磐の岩石は甚だ堅硬である。

一 炭層の厚さは一米乃至三米で稼行に適當な厚さである。

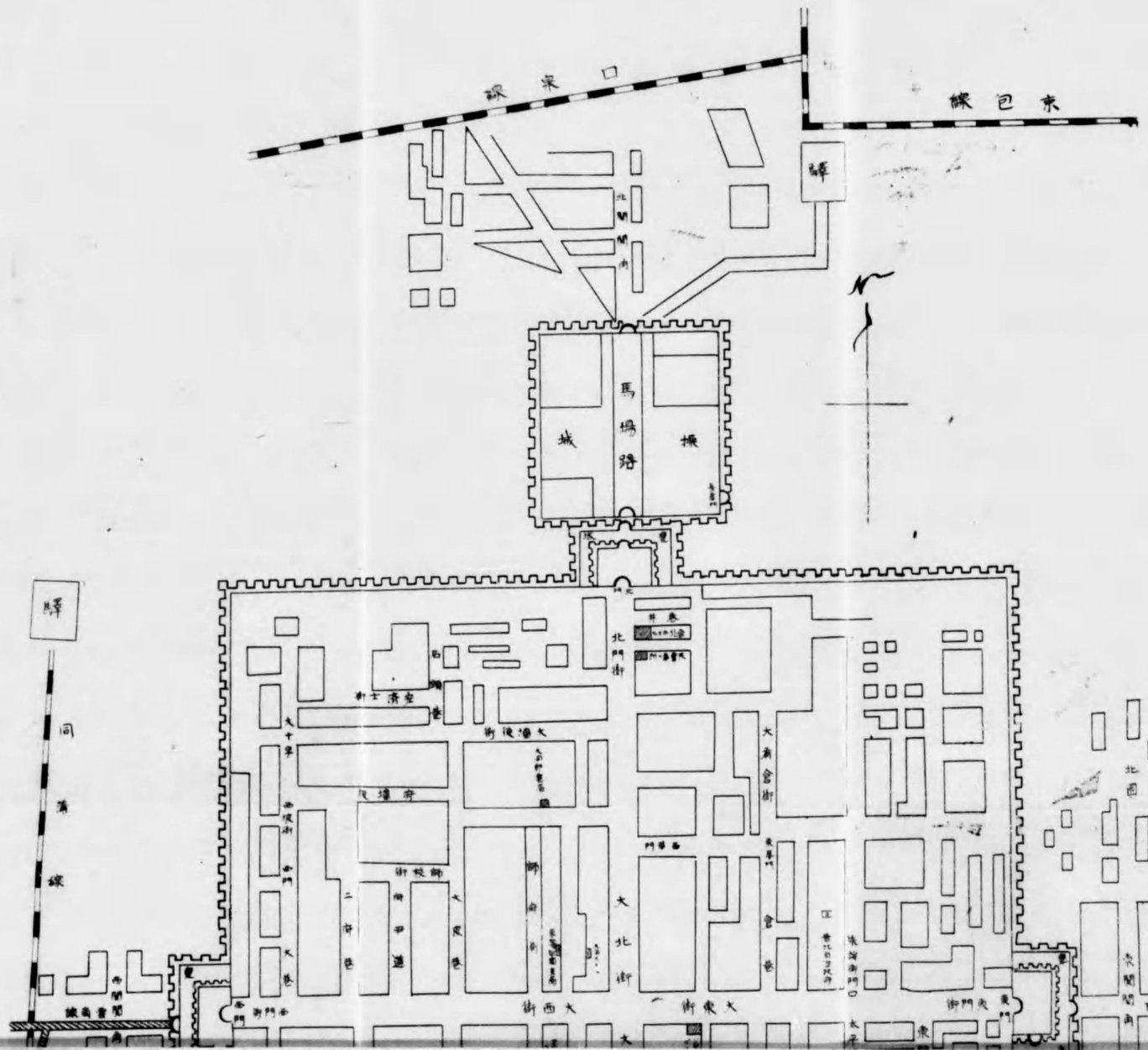
一 夾石は殆どない。

一 露頭附近を除き他は傾斜極めて緩慢である。



縣城南西二十粁にあり、永定莊に炭礦事務所がある。大同驛

大同市街圖



の上部に互層をなして
〔炭層〕 本炭田中稼行
行區域内では三層乃至
ぬが一・二米—三米餘に
〔炭質〕 高度歴青炭で
質を有し大塊を得る事
十%乃至九十%である
るから工業用炭、家庭

頁岩があり上部含炭層である珠羅紀、真岩、礫岩、砂岩等は其の上部に互層をなして居る。

〔炭層〕 本炭田中稼行出來得る炭層は總數七層であるが、現稼行區域内では三層乃至四層と豫想せらる。各層の厚さは一定せぬが一・二米—三米餘に達する。

〔炭質〕 高度歴青炭で灰分少く質堅硬、立方形狀に裂碎する性質を有し大塊を得る事が容易で、塊炭（三寸立方）の割合は七十%乃至九十%である。發熱量高く、火つき、火持ち良好であるから工業用炭、家庭用炭として極めて優良である。尙下部含

事が出來る。尙最近の調査のによると四百億噸と稱せられてる。

〔特徴〕 本炭田は採掘技術上より見て、左の如く極めて理想的な天然條件を具備してゐる。

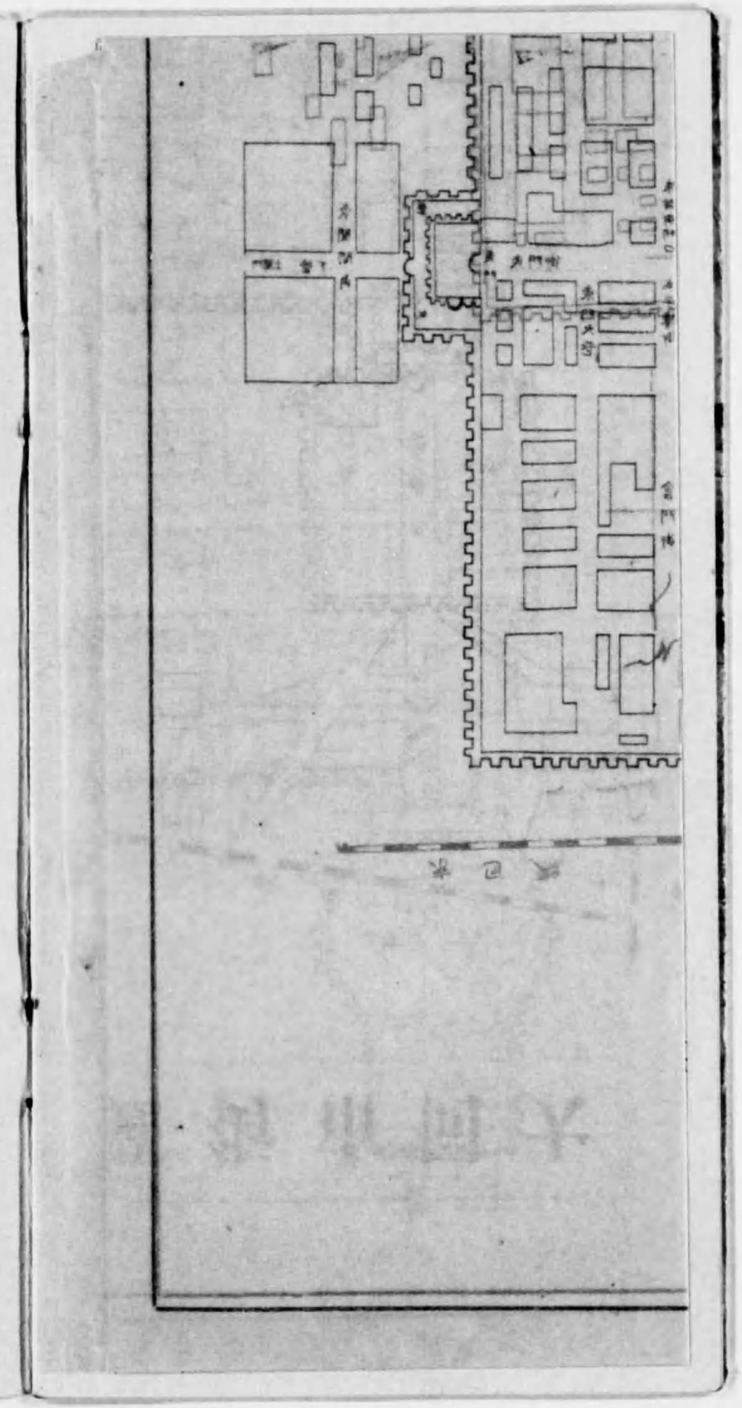
一 炭層は地質的變動を受ける事甚だ少く、斷層皺曲は稀である。

一 天盤の岩石は甚だ堅硬である。

一 炭層の厚さは一米乃至三米で稼行に適當な厚さである。

一 夾石は殆どない。

一 露頭附近を除き他は傾斜極めて緩慢である。



一　坑内の湧水は極めて少い。

一　坑内の爆發瓦斯存在は極めて稀である。

かくの如く諸條件に惠まれて居るのは北米ペンシルバニヤ洲の大瀝青炭田があるが、大同炭田は炭層が地下淺く（深くても大同平野平均水準面下四百米の豫想）數枚の層が適當なる距離を距てゝ存在し粘結炭、不粘結炭を併存し且つ瓦斯の危險のない點では優つて居る。

〔沿革〕　大同炭田の開發されたのは相當古い時代に屬するが、確實な史實もないので明かでない。

民國十三年山西省當局の計畫により設立された軍人煤廠が口爾鎖附近十餘箇所に於て試掘したのが初まりで、これは内亂により一時中止し十七年秋に復活し、永定莊附近で開鑿した。これが晉北礦務局となつて現在に至つたものであるが、埋藏量に比して採掘は少量で年百萬噸内外に過ぎなかつた。

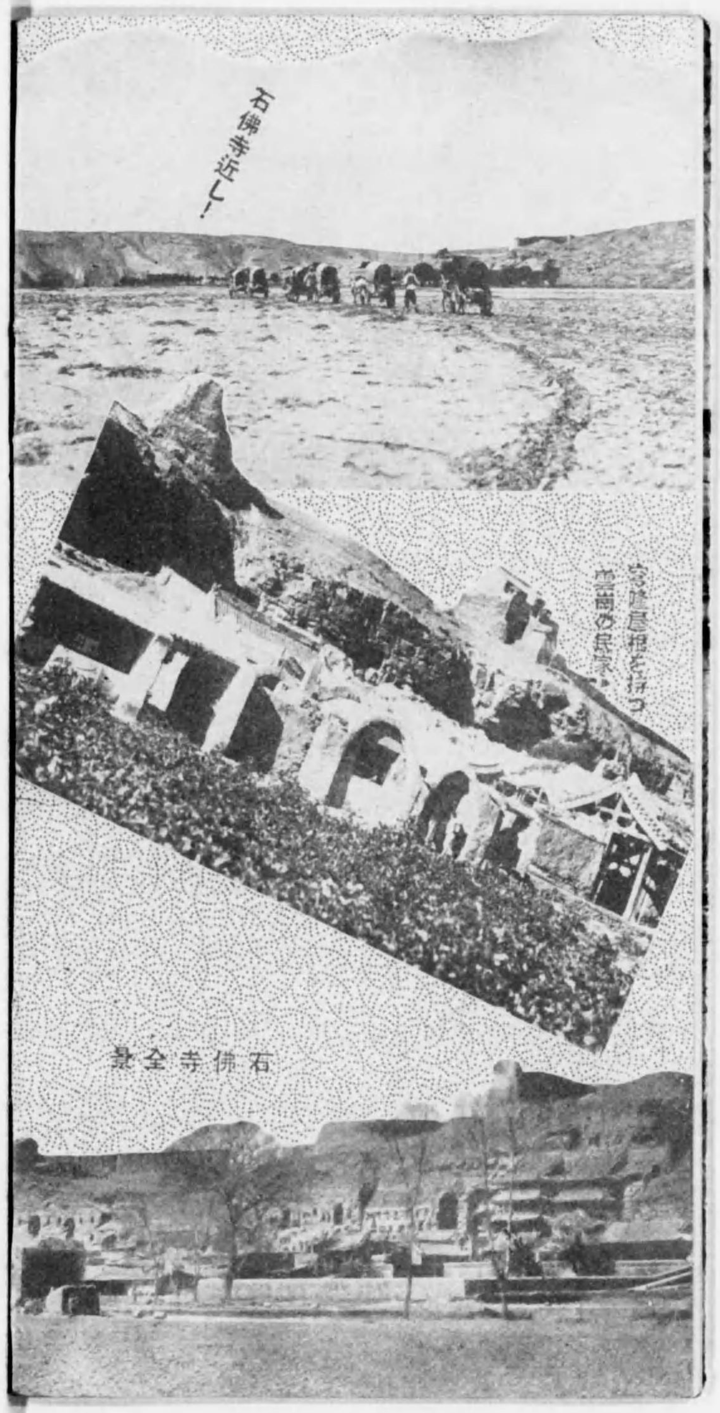
大同炭礦

縣城南西二十粁にあり、永定莊に炭礦事務所がある。大同驛から口泉驛まで運炭線があり一般貨客の便に供してゐる。口泉から各坑迄は一里内外あり、何れも輕便鐵道の便がある。昭和十二年十月九日我軍之を接收し、滿鐵派遣員に依つて採礦作業を繼ぎ今日に至つたのである。坑内には二百ボルト三十ワットの電燈を架設し、爆發性瓦斯の危險なく、アセチリン燈と菜種油燈をも使用してゐる。

昭和十四年七月五日印刷
昭和十四年七月十日發行　　定價十錢

編纂人　奉天市大和區住吉町五番地　藤井清
發行人　奉天市大和區住吉町五番地　西田龜萬夫
印刷人　奉天市大和區協和街四段　鍋田覺治
印刷所　奉天市大和區協和街四段　滿日印刷所

發行所　奉天市大和區住吉町五番地　ジヤパン・ツーリスト・ビユーロー



終